

ホームルーム活動におけるアクティブラーニング の基礎的スキルの向上に関する実践 — MAST の第一歩 —

関根 健雄^{*1}, 森下佳代子^{*2}, 田中 仁^{*2}

Developing Fundamental Competencies For Active Learning Skill through Homeroom Activities — The First Step of MAST —

Takeo SEKINE, Kayoko MORISHITA, and Hitoshi TANAKA

This study aims to discuss the significance of establishing students' basic skills for Active Learning through homeroom activities, because the activities incorporate holistic aspect of non-curricular education. To enhance students' autonomy, we formulated an approach that would facilitate the competencies through homeroom activities. We called our strategy MAST, which stands for "Method for Active-learning Skill Training." This study employs three approaches: (1) analysis of self-assessment on Fundamental Competencies for Working Persons, (2) individual supports and understandings recorded in a datebook, (3) improvement of homeroom activities to enhance students' interpersonal skills. MAST does not promise immediate results in reinforcing teaching methods in particular subjects. It aims to help gradually promote students' intrinsic motivation to be independent learners. Consequently, our capital suggestion is to revitalize lectures aimed at Active Learning.

KEYWORDS : Active Learning, Fundamental Competencies for Working Persons, generic skill, Team Work, Homeroom Activities, cooperation, plan-do-check-action cycle

はじめに

アクティブ・ラーニング（以下、AL）の導入が求められて以降、授業ではグループワーク、ペア

*1 一般科(Dept. of General Education), E-mail: sekinetakeo@oyama-ct.ac.jp

*2 一般科(Dept. of General Education)

ワーク、ディスカッション等を取り入れてきたが、十分な成果が得られず、学生の十分な学習への動機づけにつながらないと感じることが多い。教員の授業スキルの向上は必要だが、学生にも AL の形態で学習するためのレディネス (readiness) が不足していると感じられることも多く、それは学級担任としてホームルーム (以下、HR) 運営をする際にも感じられる。AL に関して、溝上 (2014) は「一方的な知識伝達型講義を聴くという (受動的) 学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う」(P.7) と定義している。また、AL で求められる認知プロセスの外化の実施の際、学生たちがその思考や理解を伝達、議論、発表することが十分にできない背景には、学生にそれらのトレーニングがなされていないことがある (P.39) と指摘している (溝上、2014)。本研究の目的は、多くの AL に関する研究のように特定の授業・科目等における AL 型授業の手法の改善や構築ではなく、高専の低学年の HR 担任として、「認知の外化のトレーニング」を HR 活動の中で実施することで AL の基礎的スキルの伸長を図ることに焦点を絞ったものである。HR において学生たちは学校生活やキャリア形成に関する様々な課題に直面し、集団としてその状況に参加することで学習し、課題を解決していくのであり、そこで求められるスキルは AL においても有用なものであるため、我々はこの手法を MAST (Method for Active Learning Skill Training) と名付けた。本稿は 4 月から 7 月上旬までの小山工業高等専門学校 (以下、本校) 1 学年 1, 3, 4 組の 3 クラスで約 3 か月の試みをまとめ、今後の展望について考察したものである。

授業において AL への転換が円滑に進まない要素として、学生に主体性やリーダーシップの欠如、相互関係を構築する力が不十分であることが考えられる。これらの要因に関しては『アクティブラーニング失敗事例ハンドブック』(2014) に詳しい。これらの能力を育成することは重要ではあるが、授業時間中においてそれらの訓練を実施することは不可能である。学生の能力は授業中にのみ成長するわけではなく、日常生活や授業外の活動において成長するはずである。しかし、高等専門学校の低学年において HR 担任として学生と接していると、授業外の学校生活でも同様の問題点が存在し、HR に関わらず集団での活動が停滞することを目の当たりにする。

本校では、平成 28 年度より 4 学科の学生を混合し、5 クラスに編成する「混合学級」が実施された。これは専門学科の垣根を超えた人間関係の構築、将来の学際的研究を視野に入れた試みであり、学生には以前にも増して主体的に意見を発信し、人間関係を構築する力が求められることになった。これを機に、授業外の活動で担任教員が計画的に指導することのできる HR 活動に着目し、学生が主体的な学習者となるために必要な能力の伸長を促進させるための支援・手法を構築することで、授業を活性化するとともに、将来の主体的な学習者の育成へとつながると考える。MAST の具体的な方策として、(1) HR 担任から学生に対するサポートとしての『フォーサイトふり返り力向上手帳』の活用、(2) 「社会人基礎力」(経済産業省)・「学士力」(文部科学省) 等に基づいた HR 活動の充実によるクラス集団の対人関係能力の伸長、さらに (3) 教員同士の協働体制の構築を想定している。これらの方策の実現によって本校における教育の質の向上につながると考えている。本稿においては、上記の (1) と (2) の方策について、これまでの実践と結果を報告する。

1. 「社会人基礎力」からみた本校 1 年生の傾向

「社会人基礎力」とは、12 の能力要素からなる 3 つの能力から構成され、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として、経済産業省が 2006 年から提唱しているものである。企業や若者を取り巻く環境変化により、「基礎学力」「専門知識」に加え、それらをうまく活用していくために「社会人基礎力」を意識的に育成していくことが今まで以上に重要となってきていることがこの背景にある (図 1)。

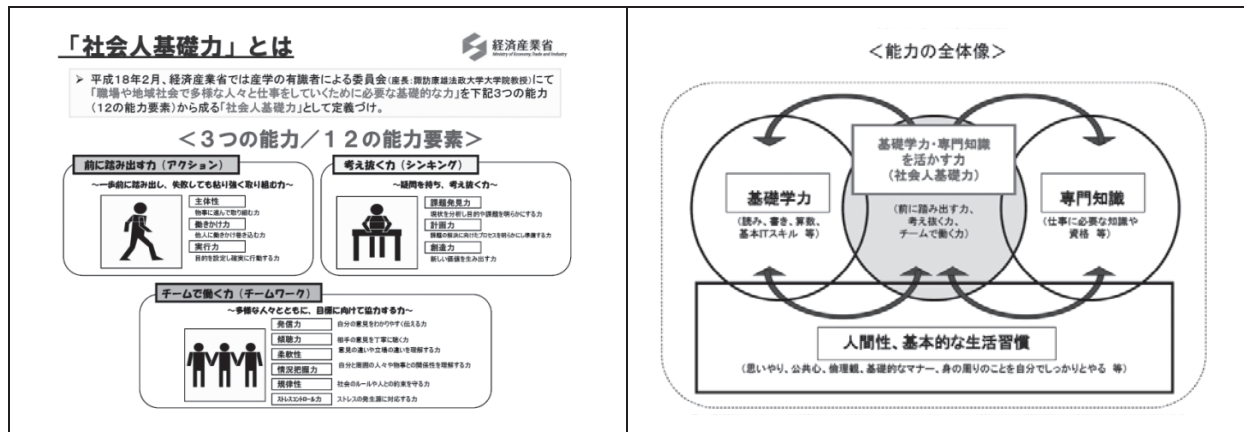


図1 「社会人基礎力」とは（経済産業省 HP より転載）

「社会人基礎力」で求められている技能・能力（態度）については、「学士力」や「ジェネリックスキル（generic skill）」、「コンピテンシー（competency）」等においても同様にその重要性が指摘されている。本校1年生3クラスにおいて、経済産業省で作成した「社会人基礎力チェック」を7月上旬に行った。これは36項目の質問事項を4段階で自己評価し、各該当項目の評価によって「3つの能力」と「12の能力要素」の状況や今後改善が必要な点を考察するものであり、その結果が表1である。また、126名の平均値をレーダーチャートで表したものが図2、図3である。また、特徴的な度数分布を示した6つの能力要素を抽出しグラフにしたものが図4である。各「12の能力要素」に関しては対応する質問が3つあり、それぞれの質問に対して、4「ほぼその通りである」、3「ややその通りである」、2「ややあてはまらない」、1「ほぼ当てはまらない」の4段階で回答した。

表1 「社会人基礎力チェック」の平均値と度数分布（126名）

3つの能力	12の能力要素		平均値	度数分布
前に踏み出す力	主体性	物事に進んで取り組む力	2.94	0.545
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力	2.99	0.624
	実行力	目的を設定し確実に行動する力	2.95	0.594
考え抜く力	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力	2.93	0.553
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力	2.82	0.581
	創造力	新しい価値を生み出す力	2.87	0.666
チームで働く力	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力	2.85	0.569
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力	3.18	0.561
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力	3.16	0.595
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力	2.94	0.622
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力	3.36	0.516
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力	2.94	0.756

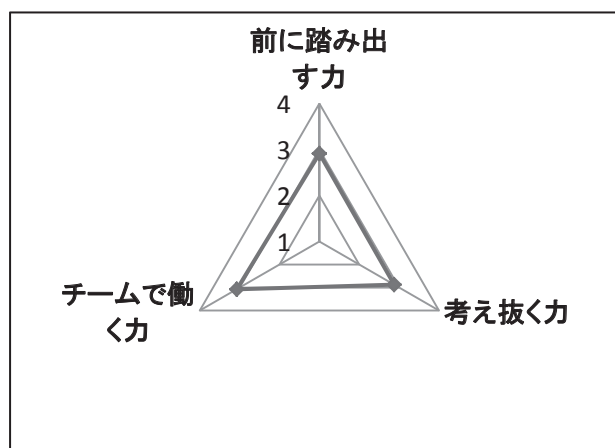


図2 「3つの能力」平均値

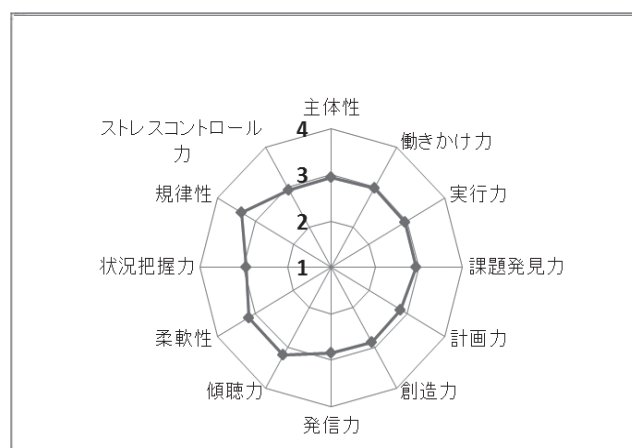


図3 「12の能力要素」平均値

平均値が高い項目は「規律性」「傾聴力」「柔軟性」、平均値の低い項目は「計画性」「発信力」「創造力」となっている。「規律性」「主体性」「課題発見力」は標準偏差が小さいが、「ストレスコントロール力」「創造力」「働きかけ力」は標準偏差が大きい。12の要素の各項目では、「規律性」「傾聴力」「柔軟性」で自己評価の高い学生の割合が多い。一方、「ストレスコントロール力」は個人差が著しく、相当する3つの質問において、すべての自己評価が「1」である学生が3%存在する。「働きかけ力」「状況把握力」「創造力」は二峰性・三峰性があり、著しく自己評価の低い学生が多い。個々の学生を見ると社会人基礎力の自己評価が低い学生は「実行力」「創造性」「傾聴力」「状況把握力」「ストレスコントロール力」が低い評価であり、「発信力」も低い評価であるため、教員からの働きかけが必要であると考えられる。図2や図3が各能力や能力要素での高い平均値を示しているものの、図4からはこれらの能力について苦手だと感じている学生が多数存在することが見えてくる。

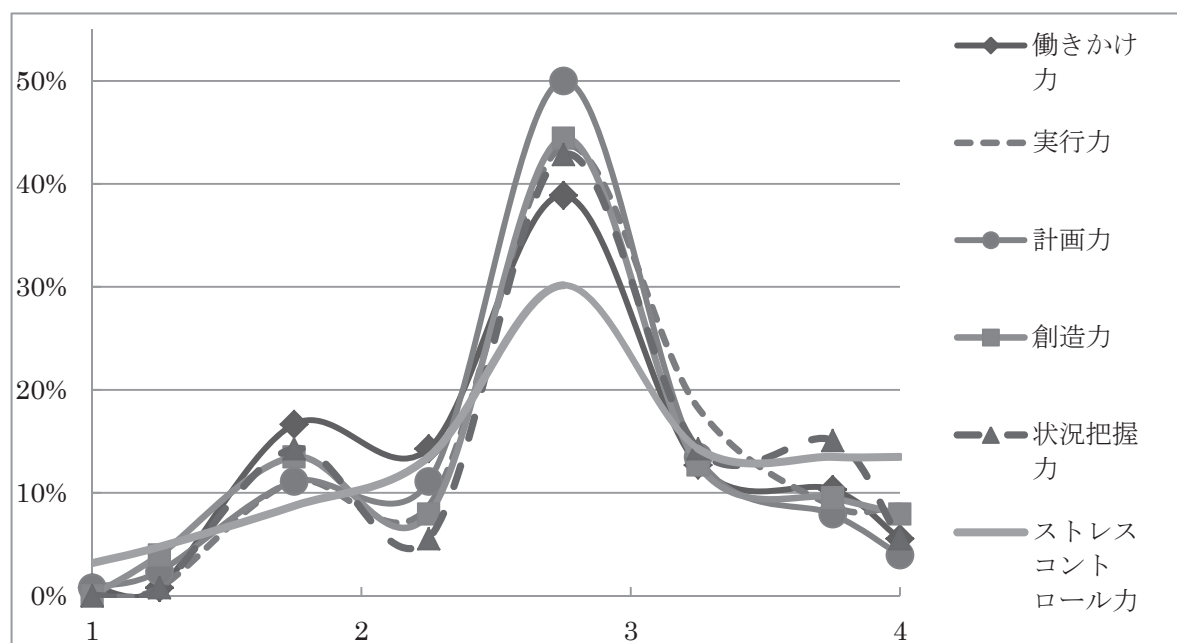


図4 抽出した6つの能力要素の度数分布

このアンケートはあくまで自己評価であり、6月に行われた前期中間試験の結果との相関性は低

く、学生の性格に大きく左右されていると思われる。そのため、今後は各教員の学生観察や理解、クレペリン精神分析検査などの結果との照合が必要であるものの、学生が自身の生活をどのように捉えているのか理解する資料の1つであり、HR 担任が学生の日常生活や学習習慣の確立のための支援を行う上での指標の一つになり得るだろう。

2. 『フォーサイトふり返し力向上手帳』による学習習慣確立への支援

主体的学習者には自己管理が不可欠である。「計画性」「実行力」、PDCA サイクルでの自己管理は高専の1年生で全てを獲得することは不可能であるが、その基礎を形作することは可能だろう。本校1年生ではStephen R. Coveyの*The 7 Habits of Highly Effective People*に基づいた『フォーサイトふり返し力向上手帳』を試験的に導入し、学生のALの基礎力の向上を図っている。平成27年8月の「教育課程企画特別部会」で指摘されたように、ALにおいて不可欠な「主体的な学び」にはキャリアとの関連付け、計画的な取組、自らの学習活動を振り返って次へとつなげることが重要であることから、7つの習慣に基づき毎日の生活、学習、を中長期的にふり返し、PDS/PCDA サイクルをスパイラルアップすることを目的としているこの手帳の活用はALの基礎的スキルを伸長する上で有効であると考えた。1年生5クラスでは4月に配布、クラスで運用を開始し、6月18日（水）には手帳を開発した出版社から講師を呼んで使い方についてのガイダンスを行った。週1回ほど提出させ、担任が内容を見てコメントする。学生たちはTo Do リストとして使用したり、学習の記録、生活の記録、学級担任との意見交換や連絡などを書いている。また、テストへ向けた学習計画の立案や反省にも活用が可能だ。

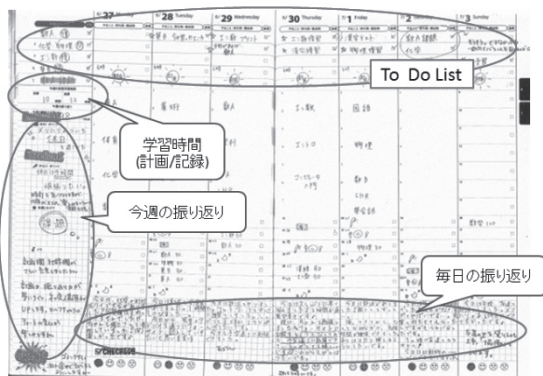


図5 『フォーサイトふり返し力向上手帳』
実践例1（週間、補足説明は筆者）

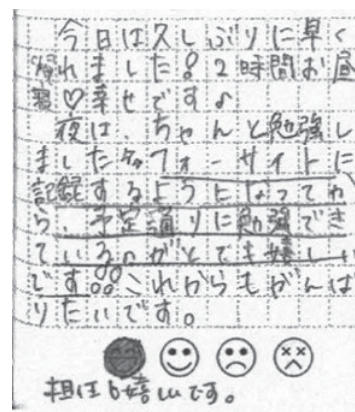


図6 『フォーサイトふり返し力向上手帳』
学生のコメント（図5の一部拡大）

図5は1週間の計画や実施状況、次週へ向けた改善について記入するページのある学生の実践例である。毎日の振り返りの欄の1日を拡大したものが図6であり、計画通りに学習が進むことで自主学习への動機づけが図られることの成果が表れている。また、学生によっては月間スケジュールのページを有効活用している者も見られる。こうした手帳の指導は、彼らが自らの日常生活をPDCA サイクルで振り返ることの意識づけに有効であることに加え、自らの担当学級の授業を担当しないHR 担任教員にとっては、学生との貴重なコミュニケーションの機会となっている。変化を感じ取ったり、質問やそれに対する回答などを書いたりすることもできる。加えて、6月に実施した前期中間試験では補助的なワークシートを用いて、テスト計画立案・反省をする活動を行ったが、将来的には1冊の手帳で各自がスケジュールを管理し、主体的な学習活動ができる力の育成を目指

3ヶ月間の手帳指導からは、その活用の度合いは個人差が大きく、PDCAサイクルで自分自身の生活や学習を反省・改善できていない学生が多い。他高専では、より高専という学校システムに特化した『高専手帳』を学生が制作し、それを活用した自己管理教育の実践例(有馬他、2014)もあり、今後それらを参考にすることで、学生たちが高学年でのレポートや実験・実習、作品制作などと、計画的な自主学習を両立させる時に役立つはずであり、「社会人基礎力」等で求められる能力の獲得に欠かせないものである。これら手帳という道具を活用した教員から個々の学生に対する自己管理教育を成績分析・面談・精神検査等の他の方策と関連付けることができれば、より学生個人に則した日常生活でのサポートにつながると考えられる。

AL の失敗の原因には、学生のリーダーシップの欠如、また、他者へと働きかけ力が弱い、集団としての交流不足、また学生相互の対人関係を築く力が不足していることが考えられる。また、教員の問題として学習や活動の目的・意義・効果の説明が不足していたり活動が停滞しているときの支援が不足・不適だったりすることもその要因に挙げられる。HR 担任が授業以外の活動のかなり側面において支援が求められる高専低学年において、HR 活動の充実は学生の抱える問題への支援となり、長期的には AL 型授業の円滑な運営につながるだろう。

本校では入学直後から、学級組織、学園祭の協議のために話し合いをする機会があるが、出会ったばかりの学生同士が活発に互いを理解し議論することは難しい。しかし、これをチームワークに関する能力のトレーニングと捉え直し、教員が適切なサポートをすることで議論・活動を促進することができるはずである。図 7、図 8 のワークシートは学生同士の学園祭に関する議論が進まないために筆者が急遽準備したものである。このワークシートの導入と、議論を取り仕切る学生への支援によって、グループ、クラスでの話し合いが活発化した。

図7 プレゼンシート

図8 プレゼン判定シート

上記のような学生の活動を円滑化するワークシートは様々な書籍で出版されている。「構成的グループエンカウンター (Structured Group Encounter/ SGE)」などの活動は教員が学生同士の活動を整理し促進させることができるため HR で利用は容易であり、グループ活動の型を参考に AL 型授業で使用できるものが多いが、筆者の経験から、それらの書籍のワークシートをそのまま使用することは難しい。特に一般的な高校を想定して作られたものでは、高専の学生に適した内容・文言への変換、教員の指示やサポートの仕方も異なってくる。それらをまとめ、高専生に適した活動に転換し、容易に活用できるコンテンツとして共有することが必要である。さらに、これらのワークシートは活発な議論を促せる一方、「社会人基礎力」における「発信力」や「働きかける力」の弱い学生は他の学生とかかわれずに孤立してしまう様子も学園祭に関する議論を扱った活動やグループ活動において実際に見られた。そのような学生を如何にサポートしていくかというのも今後の課題である。さらに、現在それぞれの能力の伸長のために注目しているのが認知機能の強化を目的とした「コグトレ(Neuro-Cognitive Enhancement Training: N-COGET)」である。「傾聴力」「状況把握力」「働きかけ力」が低く、チームワークに関するトレーニングが必要な学生には有効だろうと考えており、いくつか活動を実践してみたが、今後のさらなる活用を考えている。

1 クラスに専門の異なる学生が混在する現在の学級は、月水金が学級での授業であり、火曜日の午後と木曜日1日が専門の授業となる。時間が細切れになるため人間関係の形成に時間がかかるといふ意見も学生から出ている。ゆえに、HR 活動において、これらコミュニケーションの機会を設け、対人関係能力の低い学生のための方策と並行し、不足する能力を伸長するための高専での AL の実践に基づいた、高専・本校独自の HR 活動のコースデザインが求められていると言える。

まとめと今後の展望

本研究は、4月から始まったばかりである。今後、4月に実施したクレペリン精神検査の結果を分析し、社会人基礎力テストや定期試験の結果、教員による学生観察の関係性や学生へのサポートの方法を検討していこうと考え、学生支援室との連携も視野に入れている。本校において1,2年生は一般科目の教員がHR担任をするため、それぞれの専門学科とのアドバイザーや各学科に1名は存在する学生支援室員と連携し、学生の卒業までの育成の中で、低学年時にどのような能力を伸ばすことが必要なのか協議することが必要であり、それこそがMASTの具体的な3つの方策として提示した、教員各自の独自の実践を結びつけ実践コミュニティを育成することである。『アクティブラーニング失敗事例ハンドブック』にも、AL実施における教員の問題として学習や活動の目的・意義・効果の説明が不足していたり活動が停滞しているときの支援が不足・不適だったりすることが挙げられている。これらの問題に対しても、教材の共有・情報交換・新任教員への支援・学級担任間の協働を実現することによって、教育の質の向上に寄与することは間違いない。

今後は、MASTとして現在実施している日々の学生観察と学生個人への支援、HR活動の充実に加え、教員の連携・協働体制を構築し、ALの基礎力の伸長を行う手法をある程度確立することで、AL型授業の実施に際して学生も教員も取り組みやすい環境を作ることで、授業や学習を効果的にし、深い学びを実現し、高専を取り巻くステークホルダーが求める、将来において社会的実践を可能とする主体的な学習者の育成に力を入れていきたい。

参考文献

- 1) 有馬弘智, 他:『高専手帳』, メディア総研 (2013)
- 2) ―:「スケジュール手帳の活用および開発を通じた自己管理教育への取り組み」Journal of JACT, Vol.19, No.3, pp.57-62 (2014)
- 3) 市坪誠, 他:『授業力アップ アクティブ・ラーニング』, 実教出版 (2016)
- 4) 梅澤秀監:『ホームルーム活動ワークシート』, 学事出版 (2010)

- 5) ウェンガー, エティエンヌ. 他, 野村恭彦監修, 他:『コミュニティ・オブ・プラクティス』翔泳社(2002) (Wenger, Etienne., et al., *Cultivating Communities of Practice*. Boston: Harvard Business School Press, 2002.)
- 6) 経済産業省「社会人基礎力とは」 Retrieved July 14, 2016. <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>
- 7) 小林昭文:『7つの習慣×アクティブラーニング』, 産業能率大学出版部 (2016)
- 8) 中部地域大学グループ・東海 A チーム:『アクティブラーニング失敗事例ハンドブック』, 一粒書房 (2014)
- 9) 『フォーサイトふり返り力向上手帳』, FCE エデュケーション(2016)
- 10) 溝上慎一:『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』, 東信堂 (2014)
- 11) 宮口幸治:『コグトレ みる・きく・想像するための認知機能強化トレーニング』, 三輪書店 (2015)
- 12) 文部科学省「教育課程企画特別部会 論点整理 (案)」 Retrieved September 28, 2016.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/sonota/1361117.htm
- 13) レイヴ, ジーン, エティエンヌ・ウェンガー, 佐伯胖訳:『状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加』産業図書(1993) (Lave, Jean. and Etienne Wenger, *Situated Learning Legitimate Peripheral Participation*. Cambridge: Cambridge University Press, 1991.)

【受理年月日 2016年 9月30日】